JIYU1123　最高学部教員による講座リレー

「戦後 80 年と自由学園」を共通テーマとして

村上民　吉川慎平　奈良忠寿

自由学園キャンパスを一般公開し日頃の取り組みを広く知っていただく「JIYU1123」（2025 年 11 月 23 日）の企画のひとつとして、「戦後 80 年と自由学園」を共通テーマとした最高学部教員による講座リレーを行った。戦時期の自由学園に関わる記憶・記録とその継承の課題について、自由学園資料室の村上が概要を紹介し、続いて吉川慎平、奈良忠寿よりそれぞれの専門に関わる事例を詳しく紹介することで、戦時下自由学園の教育、戦争と学校の在り様の一端を示すという構成であった。当日は各講座に 15～27 名が参加し、3 講座を通して延べ約 70 名の参加があった。

なお、同日に自由学園図書館で「戦後 80 年記念展示　自由学園と戦争　～記録資料から学び、今に活かす～」展が行われ、上記講座に関わる実際の記録資料も多く展示された。講座リレーと実物展示を通して、「戦争」と「学校」の関わりの深さを再認識すると共に、平和をつくりだす人を育てる教育の今日的な課題を共有することができた。

第 1 回「戦争の記憶・記録に向き合う ―自由学園での取り組みから―」（村上民）

0.　非体験世代は戦争の記憶・記録とどう向き合うのか？

戦後 80 年を経過し、直接の戦争体験者から話を伺う機会は激減している。自由学園においても、1930～40 年代に在学し勤労動員等を経験した世代が証言活動を活発に行っていたのは 2000 年代半ばまでである。

いま、戦争体験の継承に担い手は「人」から「もの」（記録）に移ってきていると言われる。これまでに蓄積されてきた「戦争の記憶・記録」が注目されている。

ただ、「記録」はその事実のすべてを記録したものではない。たしかに事実の一端を表しているが、一方で記録されなかった、引き継がれなかった、失われた記憶・記録、いわば「記録の不在」もあるはずだ。

このことをふまえて、現在私たちに手渡されている「記憶・記録」に慎重に丁寧に向き合うことが求められる。いつ、誰によって、何が語られ、残され、あるいは忘れられ隠蔽されてきたのか、記憶・記録の「来歴」を丁寧にたどり、そこにいた人を想像しながら、記録を読解しつづけていく、1 回でなく絶えず読み直していくことが、80 年後を生きる私たちに必要な姿勢だと考える。

1. 自由学園 「生活」と「記録」

1.1　自由学園の沿革

自由学園は、羽仁もと子、吉一夫妻が作った雑誌『婦人之友』の読者を支持母体として、最初は女子教育として、東京・池袋の地に設立された（1921 年）。キリスト教を土台とする自由教育を目指し、高等女学校令に拠らない各種学校として、国の教育制度の周縁部分に位置する。

徐々に教育の範囲を初等教育（1927 年）、男子中等教育（1935 年）と広げ、戦後は大学部を新設（1949-1950 年）現在は幼稚園から大学部までの一貫教育を行っている。

1930 年代に東京府北多摩郡久留米村（現東久留米市）に移転。北多摩地域は戦時期に中島飛行機を中心とする航空機産業の一大中心地になり、戦争末期、学園生徒はこの地域の工場に勤労動員された。工場を中心に近隣地域の空襲は激化したが、キャンパスは直接の被害を免れた。

1.2　自由学園の教育理念と方法

自由学園の教育理念と方法について、特に「生活」（生活即教育）と「記録する」ということを中心に紹介する。

自由学園は創立当初から「生活」ということを重視してきた。羽仁もと子は、どんな小さい子どもにも、その人自身の「生きる・生活」の領域がある、子どもにとって一番の学びは「自分の生（いのち）を経営」すること、つまり自分自身が「生

きる」ことの主体、責任者になることだと捉えた。そして、学校をただ知識を与える場所とするのでなく、子ども自身の「生活の場」にすることが、最も教育的であると考え、「実際科」という新科目を設けた。生徒たちはこうした学びを「家族」という小グループをつくって行い、自分としての独立した考えをもち、また他の人と協力して生活を創りだす勉強に取り組んだ。

これらの学びは、「学校から社会へ」と生徒の関心や意欲を広げ、新しい社会をつくる人を育てるという方向性を有していた。1920 年代後半からは卒業した若い女性たちが自分たちでグループを結成。消費組合運動、農村セツルメント運動、工芸運動といった多様な分野で社会活動を開始した。自由学園の学びを社会へ広め、またその経験を自由学園教育に活かすといった、学校と社会とのつながりが強められていった。

こうした、狭い意味での学校教育の枠にとらわれず、教育を社会に活かそうとする姿勢は、日本が戦時体制に入り、学校にも銃後の協力が求められるなかで、弱まるよりはむしろ強められていった面がある。すなわち、戦時国民生活の課題に対して、「新しい生活の学び」として「主体的に」取り組んでいったという事実が、自由学園の「生活即教育」には含まれている。

もうひとつ、自由学園教育の特徴としてふれておきたいのが、自分で経験したこと、学んだことを自分の言葉でまとめ、皆の前で報告したり、書いたりする、そしてそれをお互いに聞きあう、という学び方である。正解を覚えたり、人真似をすることとは対極にある学び方であり、これが、自由学園のいわば報告の文化、記録の文化として根付いていった。換言すれば、自由学園の特に生徒が作成した「記録」は、自分の学びや経験を自分でまとめる勉強の成果物であるといえるのだ。

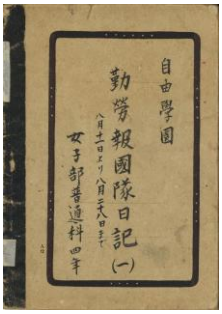
2. 自由学園における戦争の記憶・記録

2.1　どのような戦争の記憶・記録が残されてきたのか

戦争の記憶・記録について、作成主体や時期によって以下のように区分できる。（今回は、当時作成された記録だけでなく、そのときのことを後で語ったり、まとめることで新たに記録が作られたり、書き換えられたりすることも含めて、「戦争の記憶・記録」とする。）

1)　戦時期（1930-40 年代）の学びの記録、報告として作成：日番による生活日誌、授業ノート、生活表、「まとめ」、農村勤労奉仕報告書、工場動員報告書、食事記録など





2-1-1　左・男子部の実験工場日誌（1943-44 年）
右・女子部　勤労報国隊日記（1944 年）

戦時下にあっても、自由学園はその戦時生活に向き合って教育活動を活発に展開した。戦局が厳しくなり授業が停止し軍需工場への動員や食糧増産のための労働中心になっても、生徒たちはそうした活動を記録し、報告しあっていた。当時の紙やノートの使い方からは、記録を書くことに非常に熱心だったことが伝わってくる。こうした記録類は戦後、生徒達が記録室をつくり、保存してきた。

2）当時の生徒や関係者が戦後、個人、クラス、あるいは自由学園ではない市民グループなどの場で、自分の経験をまとめたり、語ったもの：日記や回想録の出版、証言など

このように、戦時期自由学園について多種多様な記録類が蓄積されてきだが、しかし最も大きな影響力があったのは、創立者羽仁夫妻による、戦争と自由学園についての戦後直後の発言だった。

終戦時、もと子は 71 歳、吉一は 65 歳、引き続き教育の責任を担った。特に終戦直後、占領下で自由、解放、復興が進むなかで、それに対するある種の抵抗という文脈で、「学園建学の根本精神は戦前も戦時中も戦後も些かの変りはない」と強い口調で言い切っている（羽仁吉一「雑司が谷短信　自由の名」『婦人之友』1946 年 2 月号など）。戦時中も絶えることなく守り通した自由学園の自由が、戦後にわかに流行している自由などと混同されてはたまらない、自由学園の自由は戦前戦中戦後とずっと一貫してきたのだ、という語りである。

こうした言説は、自由学園が文部省の圧迫にも関わらず校名「自由」を変更しなかったという事実も相まって、二人が亡くなったあとも、長い期間、学内で影響力をもつことと

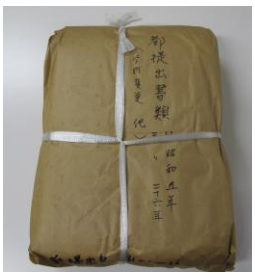
なった。一方でこのことが、戦時下自由学園の教育や経営の実相について、多様な視点から検証し、問い直す機会を大幅に遅らせる要因にもなったことも、みておかなければならない。

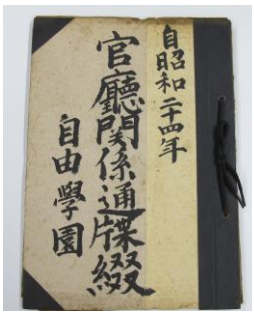
2.2　2000 年代～　体験世代の最後の証言と記録資料の再整備

これまでの、いわば創立者言説中心の状況が変わってきたのは、2000 年代である。この時期は、戦時期に自由学園に在学・在職していた「体験世代」が 70-80 代となり、最後の証言活動を行った時期でもある。

この頃、最高学部のカリキュラム再編で有力な教授陣、学生たちによって自分たちの学校と戦争の問題を取り上げ、様々な記録・記憶を検証する研究が開始された。この取り組みは当時、体験世代とそれに近い年代の人たちに、強い抵抗と賛同という両極端な反響を呼び、大きな議論を巻き起こした。これを嚆矢として、学部では様々な研究成果が蓄積されていった。

学部の動きとほぼ同時期の 2002 年、資料室発足により、学校としてアーカイブズ学に基づく記録資料の整理・調査も本格化。記録資料の蓄積については、1950 年代から主に女子学部の図書記録グループ学生たちが主に生徒作成の記録類を管理していたが、これに加えて、学校法人の組織運営文書、教員管理の資料等を含む総合的な自由学園の記録資料管理を目指した。総務部の倉庫の奥、初等部教師室の天袋、生活団の古い戸棚といった様々な場所から、先人たちによって大切に保存されていた資料が移管され、本格的な整理・調査が始まった。





2-2-1　各部から移管された重要記録

このように、2000 年代からの 2010 年代にかけては、直接の戦争体験者のプレゼンスと、様々な記録資料の再発見・再評価の「両方」が重なり合う時期であり、そうした人々の記憶と記録が、時に衝突しながらも活発な議論や行われ、あるときは記録が人々の記憶を触発し、新たな証言が表出することもあった。

戦争の記憶・記録と一口にいっても様々な作成経緯や残されてきた意味があり、それぞれに資料としての特徴、強みと限界がある。これには創立者の著作や発言も含まれる。これらを慎重に読み直していくことで、戦時自由学園の全体像が探求されていったのである。

そのひとつの成果として、『自由学園一〇〇年史』(2021 年刊、約 800 頁)がまとまった。このなかで戦時期・終戦直後の記述は総論部分だけでも約 60 頁を占めている。

3. 戦争の記憶・記録を新たな読み手にひらく

3.1 『自由学園一〇〇年史』はできたけれど…

自由学園 100 年史編纂事業は、準備委員会立ち上げから 10 年、資料整理開始から数えれば 20 年かけて取り組まれた。年史編纂の目的を自己検証と社会発信と定めし、自分たちの学校の歩みの検証を、教職員と卒業生、つまり歴史の専門家や専門業者に委託するのでなく、自分たちで手作りすることを試みた。その過程で多くの事実や論点に出会い、編纂事業自体が重要な自己検証のプロセスであることを実感した。また記述の根拠となる情報源を注で明記し、主要資料はデジタルアーカイブで公開するなど、資料公開や社会的発信を意識した編纂事業となった。

こうした編集方針や成果物に対して、特にこれまでの自由学園関係者や研究者には、従来の「自由学園史」(当事者の語り中心)との違いについて理解が得られ、一定の詩論として学術的な価値あり(含批判)との評価を受けた。

しかし、新たな課題に直面した。それは、これまでの歴史的経緯を知らない若手教職員や在校生にとっては、『自由学園一〇〇年史』自体が新たな「定説」、固定的なストーリーとして受容される傾向がある、ということであった。

私たちとしては、歴史の読み直し、再構築という作業の面白さや歴史の継承の可能性も感じていたため、「自分たちの学校の歴史」を発見していくプロセスが失われてしまうことには強い危機感を覚えた。一次資料である記録を自分で読み、そこから考え直すという作業を、どうやったら次の読み手にも経験してもらえるだろうか――本が出来て長年の重荷を下ろした安堵もつかの間、新たな課題を意識することになった。

そのようななかで 2022 年春、私たちは、ある生徒たちの

記録資料の読み方に大きな衝撃を受けた。

3.2.1　高校3年生の探求「川田文子さんのこと」(2022 年)

それは、自由学園高等科 3 年生の双子の姉妹が、新設科目「探求」において、自力で戦時期の資料に向き合い、人と会い、読解と表現をした「川田文子さんのこと」である。

川田文子さん(自由学園女子部 23 回生、1926 年東京生まれ)は、学徒勤労動員が通年動員となった 1944 年度に自由学園高等科3年生として、中島飛行機武蔵製作所に動員された一人である。同工場女子寮の生活指導や教育課工研班(工作法研究生の係)に配属された。1944 年 12 月 3 日、武蔵製作所に 2 回目の空襲があり、あらかじめ定められていた防空壕に避難したものの、爆弾の落下で壕が崩れ、川田さんを含む 10 名余が生き埋めになり、死亡した。

その事実から 76 年を隔てた 2021 年、現代の自由学園の高校3年生、山澤さん姉妹はこの川田文子さんのことを「探求」学習のテーマに選んだ。二人は川田文子さんについて、隣の家に住む早川さんというおばあ様を通じて数年前から知っていたという。早川さんは川田文子さんの姪にあたり、これまでは伯母・文子さんの命日に自由学園の慰霊碑にお花を供えてきたのだがが、足を悪くされた早川さんから献花を頼まれた山澤さん姉妹がこれを引き継ぐように。その後、いくつかのきっかけから二人は川田さんのことを漫画にしようと思いたち、「探求」を始めた。



3.2.1-1　女子部 23 回生川田文子さん、吉岡豊香さんを記念する慰霊碑

川田さん自身が書いたもの、川田さんについて書かれたものをすべて確認したいとして、二人は自由学園図書館や資料室、近隣の図書館を利用した。以下は主な資料。

①自由学園女子部二十三回生編・発行『自由学園二十三回生の記録』(1995 年、自費出版)

②自由学園女子部卒業生会編『自由学園の歴史』(婦人之友社、1991 年)

③立命館大学国際平和ミュージアム編・発行『ぼくたちわたしたちの生きた証 「若人の広場」旧蔵・戦没動員学徒遺品展図録』(2025 年)

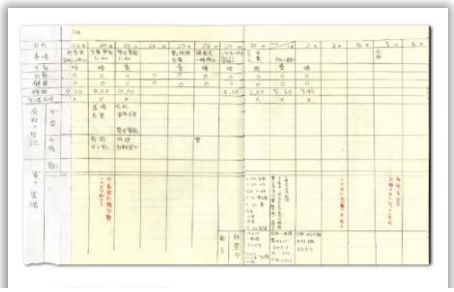
④川田文子さんが書いた記録資料(日番報告書)など

⑤戦時中の生活に関する事典類

上記資料調査を経て、遥乃さんは川田さんの同級生の証言(直江千鶴子さんが 89 年から 90 年代に発表)「川田さんの殉職」(①)をもとに漫画制作に挑戦。最初に手書きしたものを携帯のアプリで読み込んで、そのあと携帯の画面で、指で書き込んでいった。

一方の綾乃さんは、川田文子さんの遺品のひとつ、生活帳に着目し、これを一字一句、ノートに書き写してもうひとつの「生活帳」を自分で制作。川田文子さんの遺品については、遺族によって 1960 年代に兵庫県淡路島の戦没学徒の資料館に寄贈され、それがのちに立命館大学国際平和ミュージアムに移管され図録が作成されていた(③)。綾乃さんは同図録にあった川田さんの生活帳の写真をスマホで撮影し、それを拡大して中身を読み、これをもう一度ノートに筆写する作業を行った。

なお、2021 年時点で、川田さんの同級生に直接お話を伺う機会は彼女たちにはなかった。



3-2-1-2 「川田文子さんの生活帳を筆写



3-2-1-3　証言「川田文子さんのこと」を漫画に

3.3　記録資料の新たな読み方

山澤さん姉妹の探求の成果物である「漫画」と「生活帳」を手にして、驚かされたのは、何よりも彼女達の「資料の読み方」だった。二人は資料をただ読むのでなく、その資料が書かれた時や場所、その場の感覚を鋭く感知して読んでいることが分かる。たとえば、生活帳の記述を川田さんが書いたであろう一日ずつ筆写する工夫や、同級生の回想文章の行間を読みとって、人の表情やセリフを加えて漫画として表現していく努力などがそれである。

記録資料を「からだを使って読解する」という二人の姿勢にも衝撃を受けた。綾乃さんが一次資料を手書きで筆写し、遥乃さんがデジタル機器を駆使しつつもそれを自分の指で描いていく、そうした取り組みは、私には「自分のからだを使って物事を理解しようとする」ひとつの方法であると感じられた。

このように綾乃さん、遥乃さんがそれぞれ「自分の方法」を見出した。このことにより、私たち読者は川田文子さんが「19 歳だった」事実にあらためて気づかされたのである。

若い二人の仕事―新しい記録資料の読み方、戦争の記憶・記録への向き合い方に衝撃を受けた私は、これを冊子化して多くの人に届けたいと考えた。現在、この本は在校生はもちろん、学外でも多く受け入れられ、平和学習、地域資料、様々な形で活用されている。

さらに、山澤さん姉妹の取り組みは、さらに進展しており、そればかりでなく、後輩たちや先生方にも刺激を与え続けており、自分もやってみたい、記録資料を読んでみたい、と学びが広がっている。

3.4　新たな読み手にとどけるために　授業で　礼拝で　生活で

現在、自由学園では、自分たちの学校の記録、特に戦時期の記録資料を学校生活の様々な場面で紹介し、日常的に記録資料にふれることできるよう努めている。

生徒学生や教職員が日々の授業や礼拝の準備、委員会の調べものに来るとき、また探求や共生学、卒業研究などで相談に来るときなどに積極的に記録資料を紹介し、実物に触れる機会を増やそうとしている。自由学園の生活や勉強について知りたくなったらとりあえず図書館に行ってみる、資料室に相談してみるという発想がだいぶ定着してきているのが嬉しい。

ところで、現在、生徒たちに一番人気がある記録資料は、意外にもごく普通の日番報告書や生活日誌である。空きコマに友達と連れ立ってふらっと読みに来る生徒もいる。「一人ひとりみんな字が違っててておもしろい」「そこにいるようでワクワクする」「同じようなことで悩んでるな」、色んな感想が出てくる。もちろん、旧字、旧仮名遣い、時代背景の違いといった「読みにくさ」はあるのだが、。それを超える「読みやすさ」「人気」はどこにあるかと考えてみると、同世代が書いたものとしての親近感、自由学園の生活をしているという共通感覚に起因するようだ。さらに、現代の生徒学生たちもまた日常的に記録を書く経験をしていることが、彼らの記録資料の読解に大きなアドバンテージをもたらしていると感じる。

3.5　戦争の記憶・記録を新たな読み手にひらいていく　これからのために

最後に、戦争の記憶・記録にどう向き合うか、最初の問題に戻りたい。これまで紹介してきたように、自由学園の児童・生徒・学生たちにとって、自由学園の戦争の記憶・記録とは、必ずしも縁遠いものではなく、かつての同世代が書いたもの、という近さを持ってる。そう考えてみると、これは子どもに限らないはずであり、大人にとっても「戦争の記憶・記録」は自らの「身に近いもの」なのではないだろうか。

もうひとつの「近さ」として、私たちが今生きている時代が、戦争と極めて近い状況にあることも意識される。

戦争の記憶・記録、それは人間の活動の痕跡として部分的で不十分なものだが、それを辛抱強く、読み直し、どう読み取るべきかを話し合っていく、そうした活動が、現在の状況、政府の情報発信、報道、世論の受け取り方、読み取り方を練習していく、鍛えていくことにつながる。戦争の記憶・記録と向き合うことは、現在と向き合うことでもあることを心にとめていきたい。

第2回 「校内に遺された工作機械から紐解く『戦争と平和』」（吉川慎平）

本稿は、著者による講演「校内に遺された工作機械から紐解く『戦争と平和』」の講演記録に相当するものとして，2026 年 2 月 15 日に開催された「あらかわ学会年次大会 2025」での，同じく著者による講演「自由学園に遺された工作機械から紐解く葛飾の軍需工場・太田鐵工所の消長～水利に恵まれた葛飾区の工業都市化の変遷～」に際し、講演論文集用として投稿した原稿を再掲する[1]。

1. コトハジメ:工作機械とその種類

はじめに本稿で取り扱う工作機械とは，一般に「機械を生み出す機械」として「マザーマシン」と呼ばれる．あらゆる機械を構成する機械部品をつくり出すことができ，機械による「ものづくり」の原点となっている．工作機械の技術レベルは，その国の産業レベルに直結する．今日の日本の工作機械は世界トップクラスと評され，戦後，日本が技術立国として世界をリードすることができた，正に原動力といえる．

日本の工作機械の歴史は幕末に欧米からもたらされたことにより始まり，1904 年の日露戦争を契機に，工作機械の国産化が加速し，相次いでメーカーが設立．軍需の拡大と共に技術的にも発展していく[1)]．

代表的な工作機械の種類として，旋盤，ボール盤，フライス盤，研削盤などがある．中でも旋盤は最も基本的な切削加工機で，丸物加工を得意とする．工作物の回転運動と，工具の送り運動で切削する．身近な物では，ねじ切り加工で「ボルト」や「ナット」などを作ることができる[2)]．

2. 自由学園那須農場内に遺された旧式の旋盤

栃木県那須塩原市に位置する，1941（昭和 16）年開場の自由学園那須農場（付属農場）内の通称：工場棟には，近年使用されていなかった旧式の旋盤等の工作機械が残置されていた（**図-1**）．この旋盤は長く農機具の製作や修理等に使用されたが，元々は東京都東久留米市に位置する，1925（大正 14）年開設の自由学園南沢キャンパスに戦中に設置された，学校工場（軍需工場）等で使用していた物を，戦後那須農場へと移設したと考えられているが，詳しい来歴は調査されていない状況にあった．



図-1　自由学園那須農場に遺された旧式の旋盤

2025（令和 7）年，戦中の建築である工場棟は，老朽化のため惜しくも解体されることになった．これに伴い，この歴史的な旋盤を，著者らの学校当局への働きかけにより，戦後 80 年を記念し学校として保存していく方向に決定した．そこで著者らにより改めて来歴に関する調査や，保存・活用に向けた検討を行うこととした．

3. 旋盤の来歴と実験工場における軍需品製造

旋盤の来歴について，自由学園図書館・資料室の所蔵資料から調査を行った．その結果，まず当該の旋盤が写り込んでいる戦中の記録写真が複数確認された．記録写真と，当時の逐次刊行物である『学園新聞』各号の記事等を分析した結果，以下のことが明らかになった．

- 旋盤は現在の自由学園中等部・高等部の前身である旧男子部（1935（昭和 10）年創設）の黎明期に展開した「工作教育」と密接に関係している．
- 1941（昭和 16）年から「男子部科学教育の実験場」として校内に「実験工場」を設置することが計画され，1942（昭和 17）年に開場した（図-2）．
- 当該旋盤は実験工場開場までに，自由学園が買いそろえた工作機械 12 台のうちの 1 台（最も大型の工作機械）で，6 呎（呎）旋盤と呼称（以下，当該旋盤を 6 呎旋盤と呼ぶ）されていた（図-3）．
- 1942（昭和 17）年，当時の 7 年生が初仕事としてこれらの工作機械を使用し，卒業制作で 4 呎旋盤を製作した

[1] 吉川慎平,小田幸子：自由学園に遺された工作機械から紐解く葛飾の軍需工場・太田鐵工所の消長～水利に恵まれた葛飾区の工業都市化の変遷～，あらかわ学会年次大会 2025 講演論文集,2026.

記録と，4 呎旋盤の実物が現在も南沢キャンパスに遺されている．

・4 呎旋盤の製作風景の記録写真（図-4）から，6 呎旋盤を使用して 4 呎旋盤の部品を製作している様子も確認できる．

以上から，当初は 1943（昭和 18）年頃から開始された軍部と軍需産業の要請による「学校工場化」[3]の一環で，供与された旋盤であることも予想したが，実際は自由学園が旧男子部における工作教育を目的に設置した実験工場用として，1942（昭和 17）年購入した工作機械群のうちの 1 台であった．

他方，時局の要請により，実験工場では開場から 1 年後の 1943（昭和 18）年から軍需品の生産を開始し，大日本兵器湘南工機からワッシャー，ナット等の製作を受注している．更に昭和 19 年より女子部の生徒も実験工場で働き，中島飛行機，中島航空金属からも飛行機部品の製作を受注している．このような時流の中で 6 呎旋盤も必然的に軍需品の生産に使用されたとみられる．

1945（昭和 20）年の終戦とともに，校内に設置された中島飛行機，中島航空金属，日立航空機の学校工場は直ちに撤去したという記録が残されているが，自由学園が独自に設置した実験工場についての動静はよく分かっていない．

4. 旋盤の那須農場移設と農業機械化への貢献

1941（昭和 16）年に開場した自由学園那須農場は，関係者の助力により 1944（昭和 19）年には周辺地域に先駆けて電気が通じる [4]．戦後の 1947（昭和 22）年頃に那須農場の工場棟内を写したとみられるスナップ写真 1 枚に，既に 6 呎旋盤の姿が確認できる．このことから，戦中の電化も後押しして，終戦後早い時期に主な工作機械は，食糧増産の渦中にあった那須農場工場棟へと移設された可能性が高い．

戦後の農場では，農場職員が中心となり，酪農を中心とした農業機械化に積極的に取り組み，地域の農家への指導的立場も担った．卒業生の農場職員は，戦前・戦中の工作教育と実験工場での作業を実際に経験した世代であり，移転した工作機械群は，戦後の新しい農業分野の開拓に活用された．2000（平成 12）年までに，初期の農場職員は退職したため，これ以降，四半世紀の間は旋盤作業ができる農場職員はおらず，ほとんど使用されることはなかったとみられるが，幸いにも今日まで静置されていた．著者は直



図-2 自由学園男子部実験工場の様子（左奥に6呎旋盤）



図-3 稼働する6呎旋盤



図-4 旋盤制作の様子

接確認できていないが，近年「電源を入れたら回転した」という関係者の証言もあり，機械的には生きている可能性が高い．

5.「メイド・イン葛飾」の太田鐵工場製6呎旋盤

ここから自由学園那須農場内に遺された 6 呎旋盤本体（実物）に注目する．2025 年 2 月に，現地調査を実施したところ，外径寸法は，幅 2.3m×高さ 1.2m×奥行き 1.0m となっている．動力は電気モーター直結式，電源は三相 200V となっている．本体背面には製造元を示すロゴ（**図-5**）や銘板（**図-6**）が付されている．ロゴは「OHTA」，銘板には商標（TRAD MARK）「K.OT」と，大きく「太田鐵工所」とある．製造番号，製造年月の刻印は，「昭和」以外は読み取れないが，この 6 呎旋盤は国産かつ昭和期に作られた製品であることが確認できる．

製造元である「太田鐵工所」について調査を進めると，現在も「太田鉄工所」を社名に冠する会社は複数存在するが，関係するとみられる会社は見当たらない．また工作機械の中古品を扱う Web サイトでも検索したが，関連する製品はヒットしない．

そこで国立国会図書館が運用する「ジャパンサーチ（https://jpsearch.go.jp）」から精査した結果，葛飾区上小松（現在の東新小岩）にあった「太田鐵工所」の可能性が浮上した．太田鐵工所の製造品目について，帝国興信所の『帝国銀行会社要録（昭和 13 年）』[5]に，「目的：工作機械及工具製作並販売」とあり，更に『商工省　全国工場通覧（昭和 14 年版）』[6]に，「品：旋盤」とあった．また一町工場から僅かな年月で一大工場へと飛躍させた創業者・太田金吉の経営

手腕に関する評伝が複数見つかった[7,8,9].

更に国立国会図書館が運用する「次世代デジタルライブラリー（https://lab.ndl.go.jp/dl/）」から精査した結果，東京朝日新聞社『日本経済の展望（昭和14年版）』[10]に掲載された，6 呎旋盤の画像付き広告が見つかった（**図-7**）．広告から正式な製品名は一部不鮮明だが「電動（型？器？）六呎米式旋盤」と読み取れる．「OHTA」のロゴも掲載され，画像のシルエットと本体（実物）の特徴（特にハンドルなどの突起部等）が一致した．よって 6 呎旋盤は葛飾区上小松の株式会社太田鉄工所製と確認できた．

1939（昭和14）年に広告が掲載されたことと，自由学園が1942（昭和 17）年に実験工場に導入したこととは，時系列的にも整合する．6 呎旋盤は「メイド・イン葛飾」であった．

6. 水利に恵まれた葛飾における工業の発展

旋盤の製造元である太田鐵工所に注目する前に，戦前の葛飾区の工業がどのような状況であったのかについての文献調査の結果から概観する．

① 明治期：工業化の草分け 煉瓦製造所の進出

明治期に入っても，葛飾の工業は江戸期以来の農家の副業的な手工業が中心であった．このような状況は 1907（明治 40）年頃まで続き，工場としては四ツ木の日本製紐ぐらいであった．一方，1872（明治 5）年に，日本初の小菅煉瓦製造所が設立された．その後，1887（明治 20）年前後に，機械的製法による金町煉瓦製造所が設立され，これらが葛飾工業化の草分けとなった[11,12,13,14].

② 大正期：近代工業の進出と町工場の増加

大正期に入り，1913（大正 2）年に，亀有町に日本紙業亀有工場，新宿町に三菱製紙中川工場と江戸川化学工業所が設立され，近代工業の先駆けとなった．他方，1914（大正 3）年に千種セルロイド工場が本田村に設立されると，周辺にもセルロイドを扱う町工場が増加した．セルロイド工業は染色工業とともに葛飾の工業の特色の一つとなった．その後，1923 年（大正 12）年に発生した関東大震災を以降，更に発展していく．[11,12,13,14].

③ 昭和初期：軍需拡大により工業化のピーク

昭和期に入り，1932（昭和 7）年の東京市への編入以後は，地域の発展と相まって各種の大小工場が著しく増加した．7.で後述するが，太田鐵工所が葛飾区に工場を設置したのも同年である．1937（昭和 12）年の支那事変に伴う軍需の拡大による活況と，貿易発展の影響を受け，水元，奥戸，



図-5 旋盤本体のロゴ



図-6 旋盤本体の銘板



図-7 太田鐵工所の広告に掲載された6呎旋盤
『日本経済の展望（昭和14年版）』[10]の一部
出典：国立国会図書館デジタルコレクション

その他一部の地域を除いて，葛飾の工業地化が一層進み，昭和 18 年には軍需景気がピークを迎えた．主な工業製品は，ゴム，セルロイド，薬品，錦糸，紙，工作機械，組紐，織物，染色加工など多岐に渡った．工場数は大小合わせて約 2,350，従業員数は 58,000 人に及んだと推計されている[11,12,13,14].

④ 水利に恵まれた葛飾の立地的特徴

以上の通り，戦前の葛飾が工業地帯として発展した背景として，都心からの距離が近い点，土地の価格が廉価である点に加え，最大の特徴として水利に恵まれている点が挙げられる．当時，原料や製品等の物資輸送手段としては，船舶による水運（舟運）が特に重視され，荒川（放水路），綾瀬川，中川，江戸川に囲まれた葛飾区は最適地とされた．そのため工場の多くが綾瀬川，中川沿いを中心に進出した．また河川水や地下水の利用，その排水の便に優れたこともある[11,12,13,14]（結果として地盤沈下や水質汚濁等の問題を引き起こしたという側面もある）．

7. 6呎旋盤製造元・株式会社太田鐵工場の消長

戦前の葛飾区の工業の状況を概観した上で，葛飾区上小松（現在の東新小岩）に本社・工場を構えていた，6 呎旋盤の製造元である株式会社太田鐵工所に注目する．5.で

示した通り，現在は存在しない企業のため，直接的な情報はない．また，6.で示した葛飾区の工業に関する文献調査でも，太田鐵工所に関する情報は見当たらなかった．そこで，5.で示した国立国会図書館のデータベースから収集した資料等を分析した結果，以下のことが明らかになった．

- 太田鐵工所は 1924（大正 13）年，東京市本所区（現在の墨田区）で創業．太田金吉が個人経営で工作機械の製造販売を開始．従業員 10 名程度の町工場であった [8]．
- 葛飾が東京市に編入された 1932（昭和 7）年，田園地帯が拡がる東京市葛飾区上小松二九六（現在の東京都葛飾区東新小岩 3 丁目付近）に工場を移転した [8]．1928（昭和 3）年に総武本線に新小岩駅が開業してまもなくのこと．
- 1936（昭和 11）年には，敷地 2,000 坪，工場建屋 400 坪，従業員 80 人で，旋盤の他，ボール盤，堅削り盤等を製造 [15]．
- 1937（昭和 12）年の支那事変に伴う「注文の大激増」により，1938（昭和 13）年に株式会社化し工場を順次拡大．1939（昭和 14）年には従業員 650 人まで急成長した [8]．
- 創業者・太田金吉（昭和 14 年当時 41 歳）の評伝が東海出版社『今日を築くまで：立志奮闘伝』[9]に掲載されており，「積極主義」「信念に燃ゆる気概」といった言葉が並ぶ．成績優秀な優良品を世に送り出し，従業員への福利厚生も手厚いといった，評価を得ていたことも伺える．

以上から，軍需の拡大を受け創業から僅かな年数で急拡大した企業であったことが分かった．

8. 合併により日本油機製造へと改組・改称

戦時色が次第に強まる中で，模範的企業として度々紹介されてきた太田鐵工場であるが，1939（昭和 14）年以降の動静は現時点ではよく分かっていない．次に見られた資料として，『会社四季報（昭和 19 年 7 月刊）』[16]の「日本油機製造株式会社」の覧に，「下條恭平（新潟県出身の実業家，後に参院議員となる [17]）の個人会社ゑびす組に昭和精密機械及び太田鐵工所を合併，1942（昭和 17）年 6 月に現在の社名（日本油機製造）に改めた」とある．このことから，太田鐵工所は 1942（昭和 17）年頃，合併によりその社名は消滅したとみられる．よって，自由学園が 1942（昭和 17）年に実験工場に導入した 6 呎旋盤は，太田鐵工所ブランドの工作機械としては最後期の物である可能性が浮上した．

合併は業績悪化等の理由ではなく，1942（昭和 17）年 6 月の社名変更という時期を考えると，1942（昭和 17）年 5 月に国家総動員法に基づき公布された企業整備令により，他の企業と強制的に統廃合されたのではないかと推察される．

後継の日本油機製造は，戦後も存続しており，『会社四季報（昭和 22 年 9 月刊）』[18]によると，「戦時中軍需品を専ら作っていたので特別損失はかなり多い．特経会社としての整理が済めば低配当は復活出来る」とある．会社経理応急措置法に基づく特別経理会社として経営破綻を免れる措置の対象になっていたことがわかる．なお，同時点で上小松の旧太田鐵工所の所在地は「支店」とされており，工場もしばらくは残存していたとみられる．当該エリアは空襲被害も受けていないことが資料からも確認できる [19]．

日本油機製造についても，現在のところ 1949（昭和 24）年までしか資料を確認できていない [20]．下條恭平の出身地である新潟県柏崎市にも工場を有していたとみられ，その後の状況については今後の検討課題としたい．

9. 終戦直後の混乱と太田鐵工所の跡地

終戦直後の工作機械業界を取り巻く状況として，工作機械輸入協会の『日本の工作機械輸入の歴史』[21]では「業界においては終戦と共にその生産は中止され壊滅的な打撃を受けた」とある．また葛飾区の状況として，『増補　葛飾区史　中巻』では「終戦を迎え軍需を主とする工場の多くは倒産或いは事業停止などで著しくその数が減った」とある．

太田鐵工場については，8.で示した通り，戦中の合併によりその社名は消滅しているが，後継の日本油機製造移行後も上小松の旧太田鐵工場で軍需品の生産を継続していたとみられる．しかし，上述した状況から，終戦と共にその需要は皆無になったと推察される．また，戦後 GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）は占領政策の一環で軍需工業の解体と戦後賠償のため，軍需用工作機械を徹底的に調査したとあり [21]，旧太田鐵工所にも調査が入った可能性は高い．この点についても今後の検討課題である．

旧太田鐵工場跡地については，住宅不足を補うため日本住宅公団が葛飾区内で 2 番目となる上小松団地（東新小岩三丁目団地）を建設し，1957 年（昭和 32）年に管理開始している [12]．それまで 10 年余りの間の状況は現時点では分かってない．このような軍需工場跡地が住宅団地となるケースは各地で散見される．現在は 2 代目となる UR 都市機構のアーバンライフ東新小岩団地となっている（**図-8**）．

現在, 6.で示した明治以降, 大正, 昭和前期に葛飾区に進出した工場のほとんどは, 移転, 廃業等々によりごく僅かになり, 跡地は住宅や公園, 商業施設等に転換された. 葛飾区内には, そうした工場・工業の面影を残す記念碑やモニュメントも設置されている. 三菱製紙跡の葛飾にいじゅくみらい公園には通称:地球釜(蒸し釜)のモニュメント(**図-9**)が, 千種セルロイド工場跡の渋江公園には葛飾区セルロイド工業発祥記念碑(葛飾区登録有形民俗文化財)(**図-10**)が, 日本板紙跡の記念碑(**図-11**)が亀有香取神社に, 浜野繊維工業跡の東立石児童遊園内には記念碑がそれぞれ設置されている.

他方, 旧太田鐵工場跡地(**図-8**)には看板や記念碑等もなく, 団地の区画(範囲)だけが唯一工場の面影を留めている状況である. 7.で示した通り, 地元でも太田鐵工所に関する情報はほとんど見当たらず, 今回, 自由学園那須農場に遺された 6 呎旋盤の来歴を調査する過程で, 忘れられた葛飾区の工業の歴史の一部を再発見することができた.

10. 歴史的な旋盤の保存・活用に向けて

人類が発明した工作機械は「ものづくりの原点」で, あらゆるものを生み出すことができる. しかしそれは時によって全く異なる性格を持ってしまう. 自由学園那須農場に遺された 1 台の 6 呎旋盤は, 80 年以上前の戦争の時代に産まれ, その後長く平和な時代に使われ, 奇跡的に今日まで遺されてきた歴史的資料である. 人類が文明としての工作技術を何に使うのか, それを問いかけ続ける身近な遺産として, 自由学園のみならず広く価値を見出し活用していかなければならないと考える. 一つは, 戦中に東久留米市の自由学園南沢キャンパス内の軍需工場で使用された工作機械であり多摩地区の戦争遺産として, 一つは, 那須塩原市の自由学園那須農場の工場棟で長く使用され, 地域の酪農の発展, 農業機械化に貢献した産業遺産として, 一つは, 葛飾区の戦前・戦中の軍需工場で製造された製品であり葛飾区の郷土資料として, それぞれ価値を有すると考える. なお, 日本工業大学工業技術博物館, ヤマザキマザック工作機械博物館等, 工作機械を多数収蔵する施設を視察したが, 太田鐵工所製の工作機械は確認できておらず, その点でも希少価値があると思われる.

具体的な保存・活用については今後工作機械を保存・展示する施設等も参考に検討を進めていく.



図-8 太田鐵工所跡



図-9 三菱製紙跡



図-10 千種セルロイド跡



図-11 日本板紙跡

参考文献

1) 清水伸二ほか:トコトンやさしい工作機械の本(第 2 版), 日刊工業新聞社,2020.
2) 澤 武一:トコトンやさしい旋盤の本, 日刊工業新聞社, 2012.
3) 自由学園:自由学園一〇〇年史, 自由学園出版局, 2021.
4) 吉川慎平:自由学園那須農場 80 年通史, 生活大学研究, No.7, Vol.1,2022.
5) 帝国興信所:帝国銀行会社要録(昭和 13 年), 1938.
6) 日刊工業新聞社:商工省 全国工場通覧(昭和 14 年版), 1939.
7) 現実社:戦時下の人的資源 財界篇,1939.
8) 実業之世界社:実業の世界, 36(5)_五月号, 1939.
9) 東海出版社:今日を築くまで 立志奮闘伝, 1940.
10) 東京朝日新聞社:日本経済の展望(昭和14年版), 1939.
11) 葛飾区:葛飾区工業の歴史 1,2, 葛飾区 Web.
12) 葛飾区:増補 葛飾区史 中巻, 1985.
13) 葛飾区:新修葛飾区史, 1951.
14) 葛飾区:葛飾区史, 1936.
15) 東京毎夕新聞社:太田鐵工所, 昭和之国勢, 1936.
16) 東洋経済新報社:会社四季報(昭和 19 年 7 月刊), 1944.
17) 衆議院・参議院編:議会制度七十年史 第 1, 1960.
18) 東洋経済新報社:会社四季報(昭和 22 年 9 月刊), 1947.
19) 日本地図株式会社:戦災燒失區域表示帝都近傍圖, 1946.
20) ダイヤモンド社:ダイヤモンド会社要覧 昭和 24 年版, 1948.
21) 工作機械輸入協会:日本の工作機械輸入の歴史, 2019.

第 3 回「防空壕と竪穴住居」（奈良忠寿）

自由学園の南沢キャンパスには、旧石器時代から縄文時代の遺跡が埋もれています。現在まで 100 軒ほどの竪穴住居跡が確認・発掘されていますが、太平洋戦争中にも 3 軒の竪穴住居跡が見つかり、当時の生徒の手で調査されています。発見のきっかけは、校内に多く掘られた待避壕（防空壕）でした。

1. 太平洋戦争下の自由学園と待避壕掘り

自由学園男子部は七年制中等教育の各種学校でしたが、太平洋戦争中の臨時措置により卒業繰り上げとなり、1942（昭和 17）年から 44 年までは 9 月卒業となりました。

1943（昭和 18）年 7 月末から、生徒により校内に待避壕が掘り始められました。1944（昭和 19）年 11 月以降空襲が激化し、男子生徒だけでなく女子生徒も待避壕を増強しています。生徒の回顧録には、待避壕（防空壕）で一夜を過ごすことも少なくなかったとあります。

終戦により、待避壕は埋められ、形状や掘られた場所ははっきりとは分からなくなりました。しかし、その後に行われた遺跡調査により、当時掘られた待避壕が見つかっています。

2. 竪穴住居の調査と待避壕掘り

自由学園最初の発掘調査は、1936（昭和 11）年、男子部（当時）校庭の拡張工事の際、2 年生だった男子部 1 回生が行ったものです。その後、学園内の工事のたびに、考古学研究が行われます。考古学に興味をもち、中心となったのは男子部 3 回生の篠遠喜彦氏です。3 年次の教育報告会、6 年次の竪穴住居跡調査（南沢 2 号住）と研究を進め、7 年生の卒業研究を夏休みに始めました。その直後、校内の待避壕掘りが始まったのです。

工事のたびに注意深く観察する心構えが、竪穴住居の発見につながりました。初等部で見つかった重複住居跡（南沢 3 号住居跡）に続いて、旧男子部で見つかった住居跡（南沢 4 号住居跡）が調査され、雑誌『採集と飼育』に篠遠氏らの名前で報告が掲載されました。

3. 自由学園の教育とその後の篠遠氏

自由学園では実物を使い、実際に体験して学びを深めていく教育が行われ、それは、各人の興味に沿っていたようです。篠遠氏の卒業研究は旧男子部七年間の結実といえます。

篠遠氏は卒業後も考古学研究を続けようとしましたが、中断せざるを得ませんでした。

戦後、考古学研究を再開した篠遠氏は、アメリカへ留学

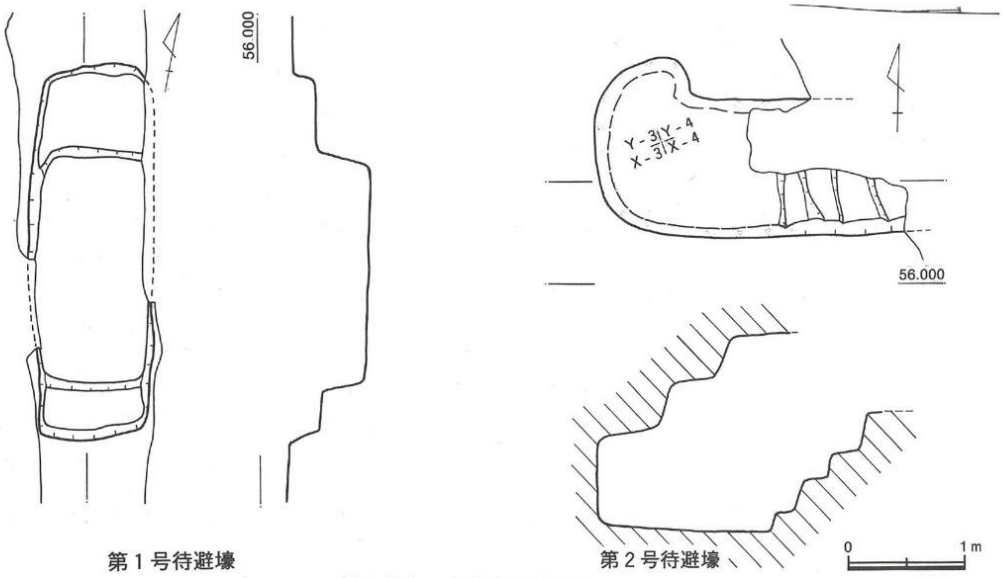


図 1　学園内の発掘調査でみつかった待避壕（『自由学園南遺跡Ⅲ』1996）

することになります。しかし途中下船したハワイで、ポリネシアで見つかる釣り針の研究を進めることになりました。氏の研究は今日でも高く評価されています。

おわりに

1943(昭和18)年の発掘調査と報告は奇跡的なできごとです。一つが欠けても、また何かが一か月ずれても起こらなかったのではないかと思います。

また、待避壕がきっかけですが、戦況が悪化し余裕がなくなった時期には、研究が途絶え、出土資料も散逸してしまいました。改めて平和の重要性を感じます。

なお、本原稿は 2025 年 11 月 23 日に行われたリレー講座で配布した要旨を転載したものです。

講演内容に関しては、次の文献も合わせご覧ください。

参考文献・図の出典

篠遠喜彦・中山栄　1944「南澤第 3 號住居阯について－南澤遺跡調査報告書第四－」『採集と飼育』6(8)

自由学園一〇〇年史編纂委員会　2021『自由学園一〇〇年史』自由学園出版局

東久留米市教育員会『自由学園南遺跡Ⅲ』1996

奈良忠寿　2027「防空壕と竪穴住居　―太平洋戦争下の自由学園男子部の教育の一例－」『生活大学研究』12(投稿予定)

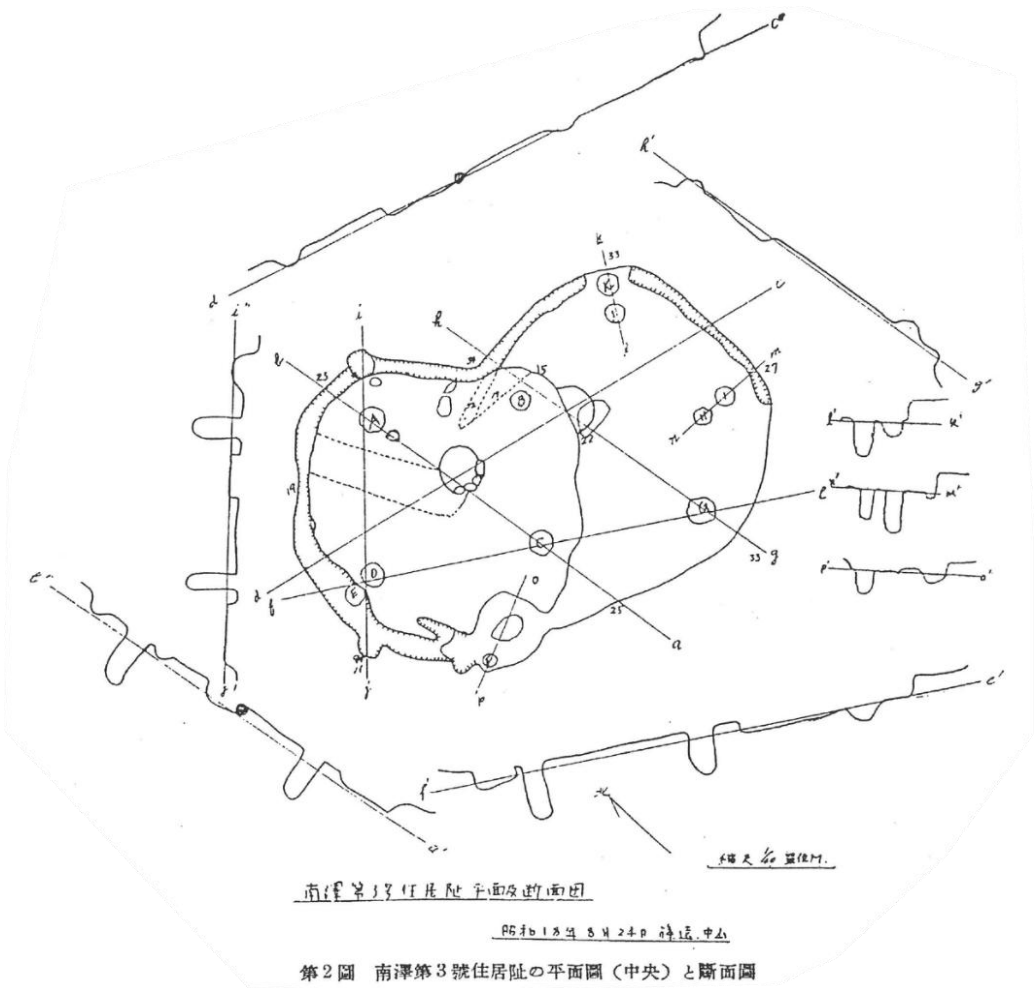


図 2　篠遠氏が発掘した住居跡の平面図　破線部が待避壕とみられる（篠遠・中山 1944）

当日チラシ

JIYU1123

自由学園をもっと良く知る 秋の学び舎



最高学部教員による講座リレー

戦後80年と自由学園

2025
11/23（日）
入退場自由
無料

プログラム

10:15-10:45　村上 民　戦争の記憶・記録に向き合う
―自由学園での取り組みから―

10:55-11:25　吉川慎平　校内に遺された工作機械から紐解く
「戦争と平和」

11:35-12:05　奈良忠寿　防空壕と竪穴住居
―太平洋戦争下の自由学園男子部の教育の一例―



村上 民
Tami Murakami
自由学園図書館長・資料室長

生活経営研究実習（図書記録資料グループ）と自由学原論(分担)を担当。2002年自由学園資料室発足時から自由学園アーカイブズの構築に携わる



吉川慎平
Shinpei Yoshikawa
自由学園最高学部教授
環境文化創造センター長，

自由学園最高学部四年課程修了，大同大学大学院工学研究科材料・環境工学専攻修了，博士（工学）



奈良忠寿
Tadayoshi Nara
自由学園最高学部教授

明治大学大学院前期課程修了。東久留米市文化財保護審議会委員。専門は考古学。



アクセス・会場

自由学園最高学部３階中教室
〒203-8521
東京都東久留米市学園町 1-8-15

西武池袋線
「ひばりヶ丘駅」南口より徒歩8分

お問い合わせ　自由学園最高学部教師室

042-422-4389

gakubu@jiyu.ac.jp

主催：学校法人 自由学園